いつかまた、どこかで。

二葉一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつかまた、どこかで。

【Ｎコード】
Ｎ０２２５Ｊ

【作者名】
二葉一葉

【あらすじ】
彼は知っていただろうか。いつかまた、どこかで、私があなたを見つけたら、聞いてあげる。あなたは知っていたの、と。

彼は、あの木の下に埋めてくれ、と言った。
まるでどっかの小説みたい、と私は一笑した。
彼は左薬指の指輪にずっと触れていた。碧い石が冷たく光ってる。
冷えないの、と私は訊く。冷えないよ、と彼は呟く。

ギラギラと地面を灼きつけていた太陽は沈み、宇宙の塵が瞬き始める。
君は、と彼は言いかけて、やめた。
何億光年とむかしに生まれた光に、私は目を細めて、続きを待った。
私は。

碧い石に触れ続ける彼の指先に触れようとして、やめた。
ねぇ、と口を開こうとして、やめた。
そっと目を閉じて、隣にいる彼の姿を思い描こうとして、やめた。

君は、幸せになるんだよ。
無責任な言葉を口にしたのは、彼。
もちろんよ。
偽りの言葉を口にしたのは、私。
彼は一度も私に触れなかった。
私は一度も彼を見なかった。

春、白い花をつけた木の下に、私は彼を埋めた。
小さな手だ、と握るたびに彼に言われていた手で土を掘る。
手の平に収まってる彼に少しだけ、笑った。

ねぇ、と冷たい土の中の彼に呼び掛ける。
私にこの指輪は大きいわ。
土に汚れた碧い石をそっと、彼に還した。

ふわり。
白く小さな花びらが舞い落ちる。
槐、というこの木の名を、彼は知っていたのだろうか。
ふわり、ふわり、ふわり。
雪のように、花が降る。

いつか、と私は呟く。
いつかまた、どこかで、私はあなたを見つけるわ。
ねぇ、そうでしょう？
柔らかい風が頬を撫でていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0225j/

いつかまた、どこかで。

2010年12月13日16時20分発行